

諏訪三郎（すわ・さぶろう）
 明治二九・三〇、昭和四九・六〇、一四、
 現在の郡山市湖南町赤津生。東京で「中央
 公論」の編集に携わり、後に大衆文学に転
 じた。「家」「応援隊」等がある。

菅生 浩（すけい・ひろし）
 昭和三・六・一、郡山生。「菓立つ日
 まで」で日本児童文学者協会新人賞。「赤
 い果糖」「ボーイフレンドは転校生」「赤い
 落下傘」等。

杉森久英（すぎもり・ひさひで）
 明治四五・三・二、石川興生。作家島
 田清次郎の波瀾の一生を描いた秀作「天才
 と狂人の間」で直木賞を受け、伝記文学の
 分野で活躍。

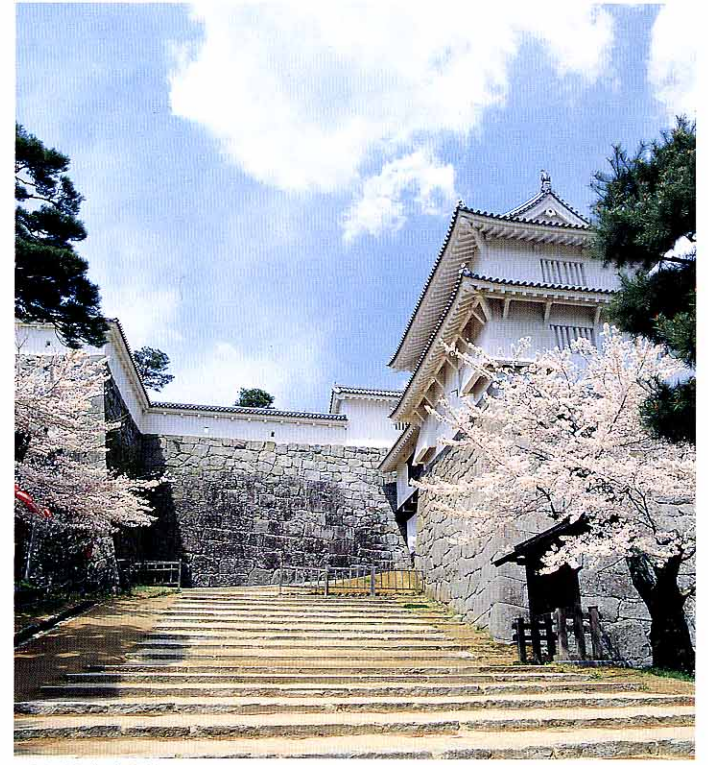


中山義秀（なかやま・ぎしゅう）
 明治三三・一〇・五
 昭和四四・八・一
 九、西白河郡大信村
 生。安積中学から早
 稲田大学に進み、横
 濱デビュは遅かった。小説「厚物吸」で
 光利一と同じ下宿
 で、文学に志すが文
 芥川賞、「七色の花」「羅摩鹿鹿」等。



舟橋聖一（ふなはし・せいいち）
 明治二七・一二・二五、昭和五・一・一
 三、東京生。「雪隠人絵図」「花の生涯」等、
 独自の恋愛文学の世界を確立した。

松本清張（まつもと・せいちょう）
 明治四二・一二・二
 一、平成四・八・四
 福岡興生。昭和二七
 年に「或る小倉日
 記」で芥川賞を受
 賞、その後、歴史小
 説などで多くの傑作
 を残した。



○薩ヶ城（二本松市）

44 大風呂敷 小説 昭和三九（一九六四） 杉森久英

大風呂敷を広げるかのような意表をつく企画力と抜
 群の実行力で、明治・大正時代の政界を疾風のごとく
 駆け抜けた傑物、後藤新平の伝記小説。青雲の志を抱
 いて若き日の新平は生まれ故郷の岩手県水沢から、須
 賀川の県立病院に付設された医学部に遊学した。「病
 院は、須賀川の北端あたりを、奥州街道からわずかば
 かり入った高台にあって、眼下には釈迦堂川を見おろ
 す景色のいいところであった」「新平はその身装のみ
 すばらしさに反して、色は白く、目の青みがかった、
 精気あふる美男子で、須賀川の子女の血を沸かせた
 ことは事実である」。また、本県にかかわりの深い相
 馬事件についても、この作品はかなりの紙数を費やし
 ている。



○中山義秀の生家（大信村）



○長沼城の碑（長沼町）



45 碑 小説 昭和四四年（一九三九） 中山義秀

「峠に一基の碑が立つてゐる。
 三重の台石の上にたち、高さ一間
 ばかりのかなり堂々としたもので
 ある」。この作品に登場する斑石
 高範、茂次郎、平太の三兄弟の一
 人、茂次郎を記念した碑である。
 碑を建てたのは茂次郎の門弟達で、「茂次郎が朝々旅
 人を送って、此處の野石に腰かけ江戸の方を眺めてあ
 た、彼の生前の姿を偲んで峠に記念の碑を建てた」の
 だ。この事から「碑」の題名が来ている。斑石三兄弟
 の辿った人生は激烈であった。山間の小藩（長沼）に
 も明治維新の波が寄せ、尊攘派の平太は、兄高範によ
 って隠居所に蟄居させられ発狂、母を殺害。高範は平
 太と二時間近くも死闘を続け、弟を斬殺。茂次郎は水
 戸天狗党に参加し敗走、峠近くの宿場に住みつき、村
 人に剣道を教え旅人の世話をして世を終る。兄高範
 は維新後は金融業者になった。歴史は兄弟の運命を翻
 弄した。



○三春の町並み

46 猫と泉の遠景 小説 昭和三八年（一九六三） 舟橋聖一

「和泉式部日記」を枕もとに遺して、維子の叔母伊
 勢子は愛人との情痴のもつれから、石川町の猫啼温泉
 で自殺した。美しい叔母にაცოგაれてきた維子はその
 愛人に接近し、自分もまた不倫の愛欲のなかに身を沈
 ませてしまう。和泉式部ゆかりの地という伝承のある
 猫啼温泉を訪れた維子が、叔母の幻影を視る場面。
 「暗い女湯で、湯を浴びる音がする……向うから裸の
 女が歩いてきて、それがまざまざとシルエットになっ
 た。一瞬その女が、右手の腕に、まっ黒な仔猫を抱い
 ているように見えた」。薄幸の佳人のイメージを遠景
 に明滅させながら展開する耽美官能的な連作小説「あ
 る女の遠景」のなかの一篇。

48 天才画の女 小説 昭和五三年（一九七八） 松本清張

銀座の一流画廊に画を売込みにきた新人画家・降田
 良子は、画廊の注目をあつめる。彼女の制作に秘密を
 感じたライバル画廊の支配人は、真相を求めて、良子
 の郷里へ向う。そこは東北本線を上野から二時間半、
 支線で十五分の町「真野町」（モデルは三春町と石川
 町）だった。画商の商算と美術評論家の欺瞞が交錯す
 る長編サスペンスである。